

花葉会賞受賞者紹介

日本文化をさりげなく ... 山手義彦のキク

安藤 敏夫

日本語だけではない。不思議なことに何語でも、最高に敬うべき人物は呼び捨てにされる。エジソン、ケネディ、ジョン・レノン、坂本龍馬、新渡戸稲造...誰も「さん」付けはしない。

我が花卉産業にも、世界に向かって堂々と呼び捨てにしたい人物がいる。その筆頭は山手義彦（1944年6月20日生まれ。1967年千葉大学園芸学部園芸学科卒業後、精興園に勤務、1978年から同園園長、1988年から有限会社精興園代表取締役。大正10年からキクの育種を続けてきた精興園の3代目）。

山手の仕事は営利活動に違いない。しかし、それが日本文化の芳醇を世界に贈り届けるものであることを忘れてはいけない。

幕末に日本を訪れたロバート・フォーチュンは、世界の果て＝日本に広がる園芸文化に目を見張った。その驚きを山手は今も世界に送り続けているのである。

どこへでも妻を伴う、この男の自然体もいい。圧倒的に重層した日本の遺伝子資源を巧みに操りながらも、どこかさりげなく...そう、余裕すら伴って、日本の文化力を世界に誇示してくれる。

その発端は「精興の翁」というキク。純白丁字咲きの中輪。種苗交換として昭和53年(1978)にオランダ Revecu社に譲渡されたこの品種は「Refour」（レフォル）と名を変えて、1982から1987年まで欧州市場を席卷した。1品種で20%シェアを占めたことは他になく、「化け物」とまで呼ばれた。端正な姿、花保ちの良さ、白サビ病抵抗性、それにあの白さ...それは日本人がこだわり続けてきた、日本の花文化が世界に問う白だった。

昭和62年に登録された「セイローザ」の欧州名は「レーガン」。ピンク重のスプレーギク。枝変わりをたくさん産んで、現在ではレーガンシリーズと呼ばれ、オランダで5億本も生産されている。それは欧州で生産されるキクの半数を上回る数字である。

エリザベスは1965年、生意気盛りのビートルズに大英帝国勲章の一つ、MBE勲章を贈っている。功績は外



記念講演であいさつする山手義彦氏

貨獲得だそうだが、英国の文化力を世界にアピールしたことを講えてのことに違いない。

食することもできず、ただその姿を眺めるだけの植物＝花は、薫り高い文化なくして生まれぬ。山手のキクが世界を往く。もしここが英国なら、彼はとっくにMBE勲章を授かっていることだろう。

国内の業績にも目を向けよう。昭和51年（1976）に発表した「精雲」は、耐暑性に優れた夏秋ギク。その誕生によって初めて平暖地の施設でキクの周年生産が可能となった。夏秋ギクの標準品種として、夏秋ギクの研究に用いられたこともあり、日本のキク生産技術史に燦然と名を残している。

平成7年（1995）に発表の「精興の誠」も時代の寵児である。20世紀末の20年間、日本の輪ギクに君臨したのは「秀芳の力」だった。作りにくいが高品質に優れたこの品種が、バブル崩壊後の2000年を境に、生産性に優れる「精興の誠」に急速に置き換わって行った。白の輪ギクであっても、生産性が問われる時代の最初を「精興の誠」が担ったのである。

キクのイメージチェンジに挑んだ成果も特筆したい。平成2年（1990）発表の「金風車」に始まる風車菊シリーズは、肥後菊とスプレーギクの交雑で、そのさじ弁から生まれるツートンカラーはスプレーギクに「和」の美しさを添えることに成功している。

平成10年（1998）発表の「セイポール」に始まるデルフィマムシリーズも、イメージチェンジに成功している。穂状についた花が下から咲き上がる性質は、キクという花のまだ見ぬ可能性を高々と歌い上げているように思えてならない。